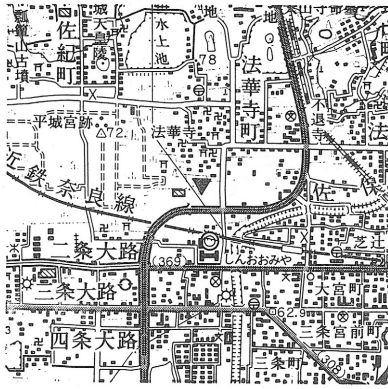


奈良・平城京左京二条二坊

十一・十四坪坪境小路跡

- 1 所在地 奈良市法華寺町
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)五月～六月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 西崎卓哉・森下浩行
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

本調査地は、平城京左京二条二坊のうち十一坪と十四坪とを画する小路にあたる。北西にひと坪を隔てて平城宮東院を望み、北は阿弥陀浄土院の推定地に接する地点である。また、東に接する十四坪では奈良国立文化財研究所による二回の発掘調査が行われており、坪内の様相が明らかになりつつある。

今回、三〇〇㎡ほどの発掘区を設定し調査を進めたところ、奈良時代の道路一条、溝三条、掘立柱列四条、土塋、橋と奈良時代以前の溝一条を検出した。

これらのうち道路は十一・十四坪坪境小路にあたる南北道路で、東西両側面に排水用の溝が掘られている。小路の幅は側溝心々で七・一七m(二〇大尺)ほど、路面幅は四・六五m内外である。今回検出したのは南北二〇m分であるが、路面の状態は一樣ではなく、部分的に灰色系の粘土で整地されている。十四坪の西辺には、小路東側溝に沿って掘立柱列があり、坪西辺が塀で閉塞されていたことがわかる。また、十四坪から小路へ小さな木橋をわたしていた時期があるらしく、小路東側溝の岸に橋脚の一部と若干の部材が残っていた。十一坪東辺は築地で画されていたと思われる。築地本体は残っていないが、その雨落溝かと考えられる小規模な南北溝がある。

木簡は小路両側溝から計三一点が出土した。小路東側溝は幅二・五～二・九m、深さ〇・七mある。溝内の堆積土は大きく三層に分かれ、最下層の黒色粘土層から二二点の木簡が出土した。西側溝は幅二・一～二・七m、深さ〇・六～〇・七m。両岸に杭列が残っており、しがらみを設けて護岸していたものと思われる。溝内の堆積土は四層に分かれ、最下層の黒色粘土層から九点の木簡が出土した。周辺の地形から溝内の水流は南流し、調査地の南を西流する菟川にそそぐものと思われることから、木簡は、十一坪、十四坪あるいは

阿弥陀浄土院推定地付近で投棄された可能性が考えられる。

8 木簡の釈文・内容

坪境小路東側溝

- (1) 「< 艘十斤 『艘十斤』」
95 × (19) × 4 033
- (2) ・「近江国□□郡必佐郷□□□□」
[里カ]
・「大伴部大山一□」
[俵カ]
(135) × 22 × 5 051
- (3) ・「< □上郡加□」
・「< 海□□□」
(94) × 16 × 4 039
- (4) 并□人」
(131) × 21 × 3 019
- (5) □口 壺六十八口
(80) × 13 × 4 081
- (6) ・「日置□」
□□
(71) × 12 × 6 019
- (7) ・天平三年
□□
(97) × (18) × 3 081
- (8) ・「一」
□□
・「五」

・「三」

帙41・帙20 065

坪境小路西側溝

- (9) 大録
(66) × (24) × 2 065
- (10) 食二升
091

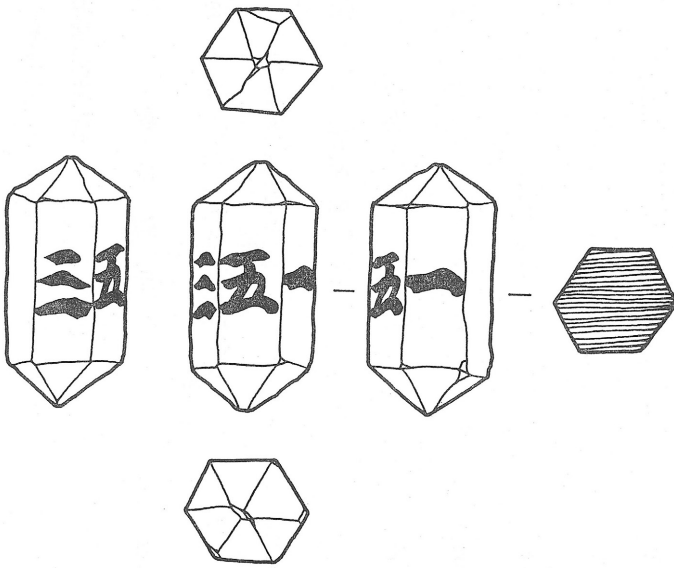
(1)は艘の付札であるが、異筆で同内容の記載がある。上部の記載は墨痕が薄く肉眼では見えないが、これが当初の付札の記載であり、下部はこの付札が不要になった段階で習書あるいは筆慣らしのために書かれたものとも考えられよう。(2)の必佐郷は『和名類聚抄』によれば、蒲生郡にあった。しかし、郡名の部分は「蒲生」ではなく一字目は「勸」のようにも見える。郷里制下のものであり、(7)の天平三年と時期的に符合する。

(8)は六角柱の両端を六角錘に削り、角柱部の隣接する三面に「一」「五」「三」と墨書したものであり、他の三面に墨痕は観察できない。各面の大きさはほぼ長さ二・七cm、幅一・〇cm。他に類例がなく、この性格を確定することはできないが、六面であること、数字の墨書があることから、賽子である可能性を指摘できよう。賽子は双六に用いられるものであったことが、正倉院宝物などによって知られるが、双六は古代において大いに流行し、持統三年(六八九)十二月、天平勝宝六年(七五四)六月に禁令が出されるほどであった。

(9)は円盤状の板の破片と見られる。「大録」は八省の大主典にあたる。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』(二九八九年)
(館野和己・西崎卓哉)



木簡(8)実測図